



漆 器 ～japan と呼ばれる日本の伝統工芸～

漆器は英語で“j a p a n”とも呼ばれており、日本を代表する伝統工芸の一つです。“j a p a n”と呼ばれるようになった起源は、遠く 16 世紀まで遡ります。大航海時代に世界中に進出したポルトガル人が日本にまでやってきて交易が始まります。この時、目をつけた交易品の一つが漆器です。交易品としての漆器は、蒔絵（漆器の表面に金粉・銀粉などで絵模様を付ける技法）や螺鈿（貝殻の内側の真珠色の部分を薄く剥いで漆器の表面にはめ込む技法）などで隙間無く装飾を施したもので、『南蛮漆器』と呼ばれています。これが徳川時代になると鎖国政策が敷かれ、交易は長崎に限られ、交易国もオランダと中国に限定されます。この時代も漆器は重要な交易品の一つでしたが、南蛮漆器の様式は衰退し、黒漆地の上に楼閣山水画を描いた、黒漆の余白を生かしたものに變化し、『紅毛漆器』と呼ばれています。



この時代、ヨーロッパの人々の目には、漆器はどのように映っていたのでしょうか。漆器の魅力の一つには、蒔絵や螺鈿などの絢爛豪華な装飾の美しさにあります。マルコポーロの東方見聞録には『黄金の国ジパング』として日本が紹介されていますが、まさに黄金の国の調度品といった豪華さです。もう一つの魅力は黒漆の色にあるようです。漆黒（しっこく）というと漆の黒色のことですが、艶やかで深みのある、見ていると惹きこまれそうな黒色です。当時のヨーロッパにはこのような黒色の塗料はなく、大変貴重なものだったようです。後に、黒漆を真似て黒色の塗装が開発され“ジャパニング”と呼ばれていることから、黒漆が憧れを持って受け入れられていたことが伺えます。

漆の色は？

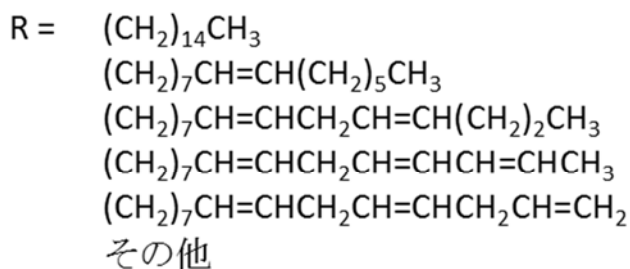
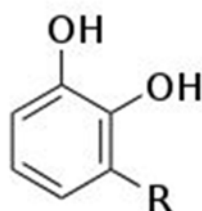
ヨーロッパで黒漆が人気だったという話をしましたが、漆の色というと何色を連想しますか？ 黒以外に、朱を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。

ウルシノキから採取した樹液（漆液）をろ過してゴミを取り除いたものを生漆（きうるし）と言いますが、生漆の塗膜は透明な茶褐色です。これが漆本来の色ということになります。生漆を精製し、その過程で鉄粉を加えると、鉄が漆の成分と反応し黒く発色して黒漆となります。また、精製した漆に様々な顔料を混ぜたものを色漆と言います。顔料に弁柄や辰砂を用いると朱漆となりますが、そのほかにも、添加する顔料により黄、緑、白など様々な色にすることができます。漆工芸には使う漆の種類と塗りの技法、また蒔絵や螺鈿などの装飾技法の組み合わせ実に多様に富んだ漆器が生み出されていることも大きな魅力の一つです。

漆の化学

漆はウルシ科のウルシノキの樹液です。主成分はウルシオールといって、構造が微妙に異なる複

数の物質の混合物です。漆の塗膜はこのウルシオールが酸化重合して硬化したのですが、酸化重合が進むには高湿度な環境が必要になります。これは、酸化重合にラッカーゼという酵素が関与しているためです。ラッカーゼは漆液に含まれる酵素で、ウルシオールを酸化し、自身は還元されます。還元されたラッカーゼは空気中の酸素で酸化され、再度活性のあるラッカーゼ酵素になります。この酸化－還元サイクルを円滑に進めるために高い湿度が必要とされており、この反応が最もよく進むのは、気温 25℃、湿度 80%とされています。漆職人は、漆を固める際に、「漆風呂」と言って部屋の湿度を高くする工夫を行ないますが、漆が固まるメカニズムが解明される前に、経験的に最適な条件を探り当てていたということが言えます。



ウルシオールの化学構造

人体、生態、環境に対する害を最小限にした物質生産を志向する学問を“グリーンケミストリー”と言います。漆は計画的に栽培可能な植物であり、酵素の働きで反応するため利用に際し熱エネルギーを必要とせず、正にグリーンケミストリーの好事例として注目されています。一つの漆器を仕上げるには多くの工程を必要とし大量生産には向きませんが、モデル物質として学べることは多々あり、実際にそのような研究も進められているようです。



高価で扱いが難しいというイメージを持たれている漆器。伝統工芸としての価値は認めていても、普段使いしている人は少ないように思います。確かに、雑な扱いをすれば剥げたりヒビが入ったりしてしまいます。しかし、独特の美しさがあり、使い込んでいくと愛着が湧いてくるものです。愛着はモノを大切に作る気持ちに繋がります。日本人ならば、一度は漆器に触れてみて、実際に使ってみるのも良いのではないのでしょうか。

参考にした情報

- 1) 「漆の伝統美を化学する」、宮腰哲雄、化学と教育、61巻3号(2013年)
- 2) 「隠喩としての漆蒔絵－蒔絵研究の現在が示唆する可能性」、稲賀繁美、美術フォーラム、第19号
- 3) 「酵素を触媒とした重合反応で人工漆をつくる」、小林四郎、高分子、53巻2月号(2004年)
- 4) 「真島利行ウルシオール研究関連資料」、久保孝史、江口太郎、化学と工業、Vol. 66-7(2012年)